

Akemi Morimiya

SOPRANO RECITAL

PIANO : IZUMI YANAI



しづかに 花は

2022.3.8 $\alpha.$

2022.7.21

Sumida Triphony s-hall

100年に一度の危機を乗り越えて

2年一度現代日本歌曲のリサイタル開催をライフワークとしている森宮朱美氏。100年に一度と言われるコロナウィルスのパンデミックをどう考え、乗り越えていくのかが試されるリサイタルが、いまここで行われようとしています。

コロナ禍において、多くの人たちがそうであるように、音楽家も先の見えない不安な時を過ごしています。ご存じのように対面でのコンサート活動は、大きな制限を強いられています。声帯を震わせた空気振動がじかに伝わる音世界はかけがえのないものです。演奏現場の空気感をオンラインで伝えることはある程度可能ですが。けれども、生の音をじかに耳朶で感じ取ることに勝る音の歓びはありません。とりわけ倍音やアーティキュレーション（呼吸感）が容易に間引かれてしまうのが配信技術の限界点なのです。

そのなかで森宮氏は、直接対面の演奏に挑みます。彼女はコロナ禍におけるリサイタル開催に際して、「文化や芸術のもしごとが途絶えることにのないように、人々が知恵を出し合って協力し合って、この危機を乗り越るためにリサイタルを開きたい」と懇願しています。そうした想いから、「しづかに花は」というテーマを選んだのです。地球上には人のみならず、動植物をはじめとした森羅万象が共生しています。人の存在を「一步引いた耳」で感じる感覚こそが、100年に一度の危機を乗り越えるために必要な姿勢ではないでしょうか。

前回（2019年）のリサイタルを思い出してみます。テーマは「小さきものへ」。自然界の小さきものをいとおしむ気持ちの選曲を重ね、3人の作曲家が手がけた歌曲が披露されました。まずは、日本歌曲の重鎮である木下牧子の歌曲集『花のかず』。日常を新たな感覚でつかみ取るような佳曲です。続いては、和泉耕二の3曲集。主張が明確で原風景を感じさせるような曲の数々を披露しました。最後は、千秋次郎の4作品。伝統的な邦楽風の曲づくりであります。小さな生物やみえない世界観が眼前に現れるような作品で仕立てられていました。

そして2022年。本年のテーマは「しづかに花は」。花は「世界平和」の象徴でもあります。その存在があるからこそ、この厳しい時代を乗り越えるための日本歌曲を奏でる意味がきっとあるのです。今回は2名の作曲家が手がけた歌曲が披露されます。

まずは、なかにしあかねの歌曲作品。なかにし氏は詩のことばを徹底的に研究し楽曲に紡ぐ作曲家です。「沈丁花によせて」は、宮川澄子の詩。なかにし氏の親友であるソプラノ歌手つながりで誕生したこの曲から、人が紡ぐご縁のつながりを感じさせてくれます。次は、みづかみかずよの詩による歌曲集『光』より3曲。みづかみ氏の詩は、まつさらなまなざしで世界を見る感覚を与えてくれます。「イエライシャン」は、夜来香とも呼ばれる花の名。夜に強く芳香を放つイメージが楽曲中に漂います。「バラ」は、花びらがほぐれる瞬間を感じさせます。「くちなしのはな」は、小さな花の生命であっても周囲の空気を変えてしまう雰囲気が読み取れます。

なかにし氏の歌曲が続きます。星野富弘の詩による歌曲集『ひとつの花が咲くように』から4曲。星野氏は詩画合わせた作品を制作しており、可憐で清らかな世界観が曲に昇華されています。どの曲の詩も、弱さと強さを兼ね備えた花のチカラを感じさせます。「声」は、私たちをひっそり見守る花の存在を感じさせます。「花」は、私たちの心情に合わせて花の姿が変わる様子を感じさせます。「愛されている」は、神様が間近に存在するような響きを感じさせます。「悲しみの意味」は、このコロナ禍に深く刺さる歌曲。人間世界だけに心を留まらせるだけでは次なる未来の灯はやってきません。辛苦を乗り越える人間の叡智を信じたくなる歌曲です。

第2部は、和泉耕二の歌曲作品。宮城県石巻市出身の作曲家で、大阪音楽大学を中心に教鞭を執りました。村瀬保子の詩による組曲『南十字星』から4曲。27歳で戦死した村瀬氏のお父上の葉書の一節が元となって生み出された4曲には、「平和への強い思い」が込められています。まだしばらく続くパンデミックの渦中の想いと共に通しています。「かたくりの花」は、村瀬氏の父母にあった辛い感情が滲み出ています。「空になる」は、海の広がりや潮の匂いを感じさせます。「南十字星……戦死した父へ」は、実体験にもとづいた想いがほとばしる抑揚のある歌曲。「いのちの鎖」は、命の広がりとつながりが深く表出された楽曲です。

人ひとりが及ぼすチカラは決して大きくはないけれども、誰しもがひとりが基本であるからこそ、私たちは知恵を出し合って協力し、大きな力にかえることができるのではないか。そうしたチカラは目に見えないけれども、その想いを音楽に仕立て上げる森宮朱美氏の音世界には、きっと目に見えるものよりも強いものになると、私は確信します。

～中山早智恵師に捧ぐ～

プログラム

第1部

なかにしあかね 曲

1. 沈丁花によせて (宮川 澄子 詩)

2. 「光」より (みづかみかずよ 詩)

イエライシャン
バラ 満紀子先生へ

くちなしのはな 晓代さんへ

☆ ☆ ☆ ☆

3. 「ひとつの花が咲くように」より (星野 富弘 詩)

声
花
愛されている
悲しみの意味

休憩

第2部

和泉 耕二 曲

「南十字星」より (村瀬 保子 詩)

かたくりの花
空になる
南十字星……戦死した父へ
いのちの鎖

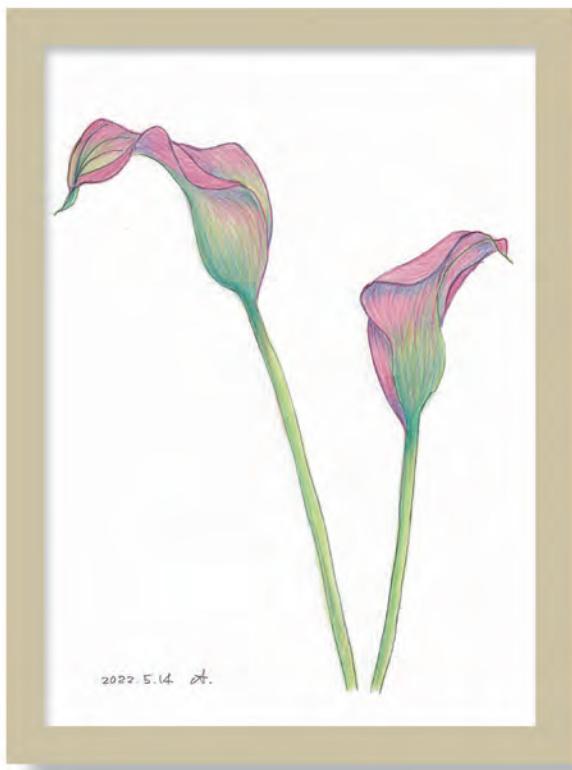
サウンドエフェクト 古山俊一



2021.9.25 DK.

Petit bonheur

小さな幸せ



2022.5.14 DK.



2022.5.7 DK.

アンケートをお願いします

